

19. SPECT を用いた虚血性心疾患の診断 (3 時間および 6 時間後の再分布像の有用性について)

中込 俊雄 高野 政明 三浦 慶和
丸山 雄三 (東邦大・RI)
若倉 学 奥住 一雄 河村 康明
山崎 純一 森下 健 (同・一内)
矢部 喜正 (同・循)

運動負荷心筋シンチグラフィは狭心症や心筋梗塞症における虚血の検出, 心筋の viability の判定に有用であるが, 一般には負荷直後の initial image および 3~4 時間後の delayed image から一過性の欠損像を検出し, 診断が行われている。しかし, 再分布完成時間は症例により遅れることもあり, そのため今回われわれは冠動脈造影を施行した心筋梗塞ならびに狭心症において, 3 時間, 6 時間後の delayed image を視覚的ならびに wash out rate を用い比較検討した。

今回 6 時間後の delayed image を加えることにより, 梗塞領域で 9/28 segment, 虚血領域で 7/13 segment に image の改善を認め, 一般的に言われている delayed image よりもさらに遅延した image が虚血の診断に有用であることが示唆された。しかし梗塞周囲の虚血や多枝病変の判定には, 視覚的方法のみでは不十分で, wash out rate 等の方法による検討も必要であると考えられる。

20. 二種のモノクローナル抗メラノーマ抗体の腫瘍内分布

太田 淑子 樋口 睦 岩崎 容子
板橋 健司 川上 興一 川崎 幸子
牧 正子 廣江 道昭 日下部きよ子
重田 帝子 (東女医大・放)
秋庭 弘道 (千葉大・放)

C57BL/6 マウスより自然発生した B16 メラノーマ細胞より細胞融合法によって作られたモノクローナル抗体 D₁₀ に, I-131 を標識し, 腹部皮下に B16 メラノーマ細胞を移植された C57BL/6 マウスに投与した。このマウスの凍結薄層切片から, Autoradiogram を作製した。抗体は, 腫瘍内に特異的に集積するが, その分布は非常に不均一であり, 集積のない部位も認められた。

D₁₀ と同系列の抗体 D₂ に I-125 を標識し, 担癌マウ

スに同時投与した。(I-131 D₁₀: I-125 D₂=3:1 の割合)。半減期の差より, 早期に得られた Autoradiogram は I-131, 1 か月以上経過したあとに得られた Autoradiogram は, I-125 の放射能をより強く反映している。2 者の腫瘍内の抗体分布には, 明らかな差があった。

Macro の方法により, Melanoma 組織内には, 異なる表面抗原決定基を持った細胞が混在していることが確認された。

21. ¹¹¹In-oxine 標識白血球シンチグラフィにより病巣検出が可能であった症例

大内 寛 村田晃一郎 中沢 圭治
石井 勝巳 坂井 和子 高松 俊道
小松 継雄 依田 一重 松林 隆

(北里大・放)

炎症巣の有効な検索法として ¹¹¹In-oxine 標識白血球を用いる方法は, 1976 年 Thakur らが報告して以来欧米を中心に多くの臨床例が報告されている。われわれの施設でもこれまで 44 例に施行し 19 例で炎症巣を検出できた。今回その代表的症例を提示し, その有効性を報告した。症例 1 は髄膜腫術後の脳膿瘍であり, 症例 2 は弛緩出血術後の腹壁膿瘍および中心静脈に留置したカテーテルの感染であった。症例 3 は交通外傷の症例で下腿に留置した静脈カテーテルが感染巣であった。¹¹¹In-oxine を用いるこの方法は ⁶⁷Ga シンチでは判断が難しい腹部, 四肢の炎症巣も明瞭に描出でき, 有効な炎症シンチグラフィとして期待できる。

22. ¹³¹I-抗 CEA, ¹³¹I-抗 CA 19-9 単クローン抗体カクテルを用いた免疫シンチグラフィの検討

——健康人体内分布を中心に——

井上登美夫 佐々木康人 (群馬大・核)
五十嵐 功 (同・中放)
杉山 純夫 岡崎 篤 (関東通信病院・放)

悪性腫瘍の局在診断ひいてはミサイル療法を目標として, 腫瘍マーカーの標識単クローン抗体の臨床応用が行われつつある。今回われわれは International Research Group for Immunoscintigraphy and Immunotherapy (IRIST) との共同研究の一環として ¹³¹I 標識抗 CEA, 抗

CA 19-9 単クローン抗体カクテルの健常人体内分布を中心に検討した。

投与 2 時間後の全身前面イメージでは、血液プール像および尿中排泄像が著明であった。35 時間像で甲状腺・胃部への遊離 ^{131}I 集積が相対的に増加し、71 時間以降は甲状腺以外の体バックグラウンドは著しく低下した。血中クリアランス曲線は 2 相性の指数関数で近似され、第 1 相の $T_{1/2}$ は 6.6 時間、第 2 相は 72.2 時間であった。ルゴールによる甲状腺ブロックにもかかわらず 3 日後甲状腺摂取率は約 3% みられ、甲状腺被曝線量は 80 mrad/mCi であった。検査時副作用は認められなかった。肝癌肝転移症例で、肝転移巣への異常集積が認められた。

23. ^{131}I -MIBG の著明な取り込みを認めたカテコラミン産生腫瘍の 2 例

石川 義弘 塩之入 洋 安田 元
梅村 敏 瀬底 正司 金子 好宏

(横浜市大・二内)

良性および悪性カテコラミン産生腫瘍の 2 例において、 ^{131}I -MIBG シンチグラムを用いた腫瘍の局在診断を行ったので報告する。

〔症例 1〕 59 歳男性。昭和 53 年より高血圧の加療開始。昭和 59 年血圧高度上昇、腹部 CT にて左上腹部に限局した腫瘍を認めた。 ^{131}I -MIBG シンチグラムにて同部位への著明な取り込みが確認された。手術所見では大動脈傍神経節由来の良性褐色細胞腫であった。

〔症例 2〕 49 歳女性。昭和 52 年より狭心症の加療開始。昭和 58 年に右腎および肝腫瘍を指摘。昭和 59 年に脳出血のため当科紹介入院となった。胸部 X 線にて肺野に数個の転移性と思われる陰影を認めた。 ^{131}I -MIBG シンチグラムでは右上腹部に著明な取り込みを認めたが、肺野への取り込みは認められなかった。本法は簡便性、描出性に優れ、副作用等も見られなかったが、症例、病変部によっては ^{131}I -MIBG の取り込みの見られないもののある可能性が示唆される